

2024/7/29

## 日本語のローマ字表記における長音符合の扱いなどについて —『和英語林集成』初版(1867)を資料として—

木村 一

### 1. はじめに

日本語をローマ字で記す<sup>1</sup>にあたり、現在、YŪRAKUCHŌのように、長音を示す符号についてウ列とオ列での使用が確認できるが、その他の列での使用は見られないようである。そこで、J. C. ヘボンによる和英・英和辞書『和英語林集成』初版(1867)・再版(1872)・3版(1886)などを用いて、ア列とイ列とエ列と、ウ列とオ列の記載時の差異の経緯を示す<sup>2</sup>。その上で、現状および検討課題などを挙げる。

### 2. 長音符合の使用の経緯

長音符合の使用差や変化について、ローマ字会(参考資料〔キ〕参照)の提言以前の国内の日本語のローマ字つづりを中心に、英米の(R. オールコック(1809-1897), S. R. ブラウン(1810-1880), J. C. ヘボン(1815-1911), J. リギンズ(1829-1912), W. G. アストン(1841-1911), J. F. ラウダー(1843-1902), E. M. サトウ(1843-1929))の著作について、多少確認を行った。3. 『和英語林集成』(初版)の長音符合の使用と参考資料を踏まえて、次の①~④が考えられる(以下、傍線は筆者)。

- ① 長音の出現頻度の違いによる符号の使用差(語種(本稿は主に和語と漢語の別)と活用が関わるか)
- ア列長音とイ列長音は、ウ列長音とオ列長音に比べ出現頻度が低いようである(以下、「<Ā と AA の例>」~「<Ō と OO と OU の例>」および3. 『和英語林集成』(初版)の長音符合の使用〔表1〕参照)。また、イ列長音はĪとIIの双方が使用されている。なお、エ列長音は確認できなかった。
  - 『和英語林集成』再版(1872)において、ア列長音とイ列長音の符号を使わない記載への変更(以下、参考資料〔ア〕・〔ウ〕参照)が生じている。
- ◇ 頻度や使用差がそもそもの横棒(マクロン)の使用の有無の根拠とできるのか。

<sup>1</sup> キリシタン資料(以下、『日葡辞書』(1603-1604)), オランダ(語)式(蘭学との関わりに留意)をはじめ、諸言語を基にしたつづり方が用いられている(杉本・岩淵(1994)を一部抜粋および追記)。

<キリシタン資料>	a i u/v ye uo/vo	ca/qa qi cu/qu qe co
	sa xi su xe so	ta chi tçu te to
	fa fi fu	ji gi zu zzu                      ǒ ô ŭ
<オランダ(語)式>	a i oe je/e o	ka ki koe ke ko
	sa si soe se so	ta tsi tsoe te to
	va/fa/ha vi/fi/hi vu/fu	zi dzi zoe dzoe

<sup>2</sup> 『和英語林集成』初版(1867)については、「和英の部」の見出し語(20,772語)のローマ字つづりのみを対象とする(語義・用例および「英和の部」はおおむね相違ないものと思われるので除く)。

☆ 列ごとによる語種の比率なども考慮すべきか (3.『和英語林集成』(初版)の長音符号の使用〔表1〕参照)。

単漢字(音読み) 例, × SAA × SII ○ SUU △ SEE (I) ○ SOO (開合は不問)

- 単漢字(音読み)の2拍目の母音は「イ」「ウ」となる(「イ」は,\*AI(例,「祭」),\*UI(例,「水」),\*EI(例,「星」)となり,\*IIと\*OIは生じないか)。
  - 和語のエ列は「おねえさん」「ええ」などになる。
- イ列とウ列で符号を使わない際には,活用語尾との関わりがあるか(以下,参考資料〔カ〕と<ĪとIIの例>参照)。参考資料〔オ〕でも,オ列長音は(oöではなく)実際にはooとしつつも「思う」をomooをomouとしている箇所もある。ラウダーの『日英会話書』(1867)のEXPLANATION OF MODE OF SPELLING AND PRONUNCIATION.に‘Ô long, like Öu’  
と説明がある(Oの上にウムラウト?)。他にも同時代の資料には一部OUとするものもある。

## ② エ列長音が用いられない理由

- エ列長音が用いられない(EIを用いる)理由は,S.R. ブラウンの記述がヒントになり得るか(以下,参考資料〔オ〕参照)。
- 2023年11月24日の小委員会資料の「ローマ字文の書き方」解説(『初等教育研究資料 第24集 小学校ローマ字指導資料』(1960)に「3 いわゆる長母音は,その文字の上にやまがた「^」をつけて表すか,または母音字を重ねて表わす。ただし,「ていねい」「命令」などの「エイ」はeiとする。»,また「なお,「ア・ウ・エ・オ」の長音には「^」をつける,「イ」の長音だけは,習慣的に「ii」で表し,「i^»,または,「i」はほとんど行われていない。」(p.147)とある。記載される用例に,ア列長音は「obâsan おばあさん」,エ列長音は「nêsan ねえさん」とある。続いて「なお,第2表のつづり方のうち,標準式のつづり方による場合は,「^」でなく,「ぼう[-]」をつけるのが普通である。
- ☆ 外来語(p.146, 150)に関する記述もあるが,訓令式ベースになっているようである。また,ヘボン式の撥音にb, m, pを用いる旨もある(p.148)。

## ③ 辞書としての排列および検索といった一貫性・整合性・合理性の問題

- 初版(1867)では,ス・ツ・ズ(ヅ)については,英語に相当する音がないことを示すため母音をZとしてSZ・TSZ・DZを使用している(The vowel sound in sz, tsz, and dz, is the same. It has no equivalent in English, but as near as possible to the sound expressed by the letters.)が,5年後の再版(1872)では使用しなくなり(以下,参考資料〔イ〕参照),SU, TSU, DZU(さらに3版(1886)ではZU)となる。
- 母音の無声化について,会話書や「手稿」(『和英語林集成』の原稿)や初版などでは見受けられるが,再版では用いられていない(以下,参考資料〔イ〕参照)。一方,参考資料〔カ〕のPRONUNCIATIONでは短音記号を用いて*ĭ*・*ÿ*として示されている(*ĭ* and *ÿ* indicate that the vowel is almost inaudible.)。なお,傾向として,初期の英字新聞や会話書は統一をはかることなくその場その場の発音が記載されることもある。他にも鼻濁音などを記すこともある。
- 3版(1886)でYEをEとしたこと(「YE方」と「YEN圓」の2語は残る)なども含め得ると考える(関連する内容にE.M,サトウの記述がある(参考資料〔イ〕参照))。この点は羅馬字会の推奨されたつづりと一部例外を含みながらも一致させた旨が,3版の序文に記されている。

る（以下、参考資料〔エ〕参照）。

- 改版に際して表音から離れていく面がある（参考資料〔イ〕・〔キ〕の注8参照）が、初版では（すべてにわたり言い得ないが）仮名遣いなどが意識されていると思われる個所<sup>3</sup>がある。

#### ④ 活字の不足

- 再版でĪやĀを使用しなくなった直接的な影響とは言い得ないが、初版のINTRODUCTIONに次のようにある。ただし、初版と再版は上海の美華書院での印刷のため、再版時には問題は解決されていたはずである。

The printing has been accomplished under many difficulties, especially from the want of accented vowels and a proper supply of capital letters which could not be procured in Shanghai, and had to be manufactured under many disadvantages. This will account for the want of uniformity and irregularity observable.

【試訳】 印刷には多くの困難が伴ったが、これもようやくできあがった。特に、アクセント符号の付いた母音（筆者注：長音を示す横棒（マクロン）の付いた母音）の不足と、上海では調達できない大文字（筆者注：スモールキャピタルを指すか）の安定した供給と、多くの障害が重なる中、自分たちで作り出さざるを得なかった。この辞書に統一性の欠如や不規則性が見られるのはこのためである。

<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei/search?lang=&mode=&book=37&page=6&zoom=0&section=4>

<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/>（明治学院大学図書館デジタルアーカイブス）

- 初期の英字新聞などの日本語のローマ字表記には符号が見られないようであり、活字の問題もあるものと考えられる。

### 3. 『和英語林集成』(初版)の長音符合の使用

次に、ĀとAA, ĪとII, ŪとUU, ĒとEEとEI, ŌとOOとOUについて、初版の「和英の部」の見出し語（20,772語）の記載について確認をする（再版以降は初版の当該箇所を中心に一部確認）。用例数は「異なり」とし、一つの見出し語に複数回出現しても1回としている。データが万全ではない可能性があるため一部概数とする。なお、（ ）内は頁と左右を示す。

#### <ĀとAAの例>

Āは、「Ā アア 嗚呼」（1左）、「Ā アア 彼」（1左）、「ĀYU アアイフ 彼云」（23左）、「KĀ-KĀ カアカア」（170左）、「MĀ マア」（249左）、「NA, or NĀ ナ」（296左）、「NIYĀ-NIYĀ ニヤアニヤア」（318右）、「OBĀ-SAN オバアサン 御婆様」（327右）、「OKKĀ オクカア 阿母」（334左）、「SĀ

<sup>3</sup> 原則、「ウ」で始まることばはUで記載される（「URAYAMASHII, KI, -KU ウラヤマシイ 羨」「UYOKU 羽翼 ウヨク」「UWA-TE ウハテ 上手」などをはじめ多数）。一方、YA・YEが後接する際には、「IYAGAWIYE イヤガウへ 彌上」「SONO-WIYE ソノウへ 其上」「URA-WIYE ウラウへ 裡上」「WIYAMAI, -au, -atta ウヤマフ 敬」「WIYE ウへ 上」「WIYE, -ru, -ta ウエル 飢」「WIYEKI ウエキ 殖木」「WIYEN ウエン 迂遠」など、17例がある。

サア」(362右),「SHĀ-SHĀ シャアシャア」(396左),「SHĀTSZKU シャアツク」(389右),「WĀ  
ワア」(514右),「YĀ ヤア(521左)」の14例確認できる(再版以降「ĀYU アアイフ 彼云」(「AA」  
の用例)・「KĀ-KĀ カアカア」ナシ,再版で「NA or NA ナ」(3版「NA or NAA ナ」),3版で「OKKA  
オツカ 阿母」)。和語(感動詞・話ことば)によるものである。この点が再版以降でAAになる理由で  
あろうか。

AAは,見当たらないようである。

#### <ĪとIIの例>

Īは,「CHĪSAI, -KI, -SHI チヒサイ 小」(41右),「HĪBABA ヒババ(マ) 高祖母」(102右),  
「NAMAĪ-NARU ナマジヒナル 愁」(301右),「NĪSAN ニイサン 兄様」(317右),「SHĪ シヒ  
椎」(396右),「SOKUĪ ソクイヒ 續飯」(430左)のように120例程度用いられている。多くは和語  
で,漢語は「HĪKI ヒイキ 鼻肩」(ヒキの変化した語),「SHĪ-G'YAKU, -szru シイギャク 弑逆」(シ  
ギャクの慣用読み),「SHĪ-JI シイジ 四時」(シジの慣用読み),「SHĪ-KA シイカ 詩歌」(シカの  
慣用読み)など,元の読み方から変化したもの過ぎないようである。再版以降はIIとなっているよう  
である。

IIは,形容詞の活用(例,「YOROSHII, -KI, -KU, -Ū, -SA ヨロシイ 宜」(541左))として220例  
程度用いられている。他にも,「MESHII メシヒ 瞽者」(268左),「MIMI-SHII ミミシヒ 聾者」  
(275左),「MOCHI, or MOCHII モチ 餅」(281左),「MOCHII モチヒ 餅」(281左),「MONO-  
II モノイヒ 物言」(285左),「NAMAĪI ナマジヒ 愁」(301左)「NII ニヒ 新」(315左),「SHIKII  
シキイ 敷居」(402左),「TAMASHII タマシヒ 靈」(455左)がある。

語尾の際にはIIとなるようであるが,語尾でも上記の「SHĪ シヒ 椎」や「SOKUĪ ソクイヒ 續  
飯」があり,判然としない面がある(いずれも再版以降はIIとなっている(3版は「SOKUI, or SOKUII  
ソクイヒ 續飯」))。また,「ナマジ(ヒ)」は上記に両様確認できる。そもそも形容詞の活用をIIとし  
ていることを考えねばならない(参考資料〔カ〕と同じ理由か)が,例数の多いIIに再版で集約したの  
であらうか。

#### <ŪとUUの例>

Ūは,350例程度である。「AKU-FŪ アクフウ 悪風」「BAHIFŪ バヒフウ 馬脾風」「BŌFŪ バ  
ウフウ 暴風」「BUN-TSŪ ブンツウ 文通」と,漢語がほとんどを占める。「AKARŪ アカルウ」(3  
版ナシ)「ASANA-YŪNA アサナユウナ 朝夕」「ITA-ITASHII, -KI, -KU, -Ū, -SA イタイタシイ 痛  
痛敷」(3版で「ITAITASHII, -KI, -KU イタイタシイ 痛痛敷」)「KUI, KŪ, KŪTA クフ 食」など,  
和語とその活用に用いられるものが多少ある。

UUは,見当たらないようである。

#### <ĒとEEとEIの例>

Ēは,見当たらないようである。

EEは,「TEEBA テヘバ 云者 (cont of *to iyeba*)」(464右)と「YOPPITEE ヨツピテエ 夜一

夜 (Yed. coll.)」(540 左) の 2 例 (再版は変更ナシ (3 版は「YOPPITE ヨツピテ 夜一夜」)) があり、いずれも話ことばの性格が強い。

EI は、630 例程度あり、例えば、「TEI-NEI テイネイ 丁寧」(465 右)、「YEI-MEI エイメイ 英名」(530 右) などと、漢語がほとんどを占める。和語は、「ASAGAREI アサガレイ 朝餉」, 「GEI-GEI ゲイゲイ」, 「HORYOI, or, HOROYEI ホロヨヒ 微酔」, 「IBUSEI, -KI, -SHI イブセイ 鬱悒」, 「ITABEI イタベイ 板屏」, 「KAREI カレイ 鱧」, 「MEI メヒ 姪」, 「MEIRI, -ru, -tta メール 沈湎」, 「NERI-BEI ネリベイ 練屏」, 「SZKEBEI スケベイ」, 「UREI, -iō, -eita ウレフ 憂」などが挙げられるに過ぎない。再版以降も、漢語・和語とも EI を用いていると言えよう。

<Ō と OO と OU の例>

Ō は、2,800 例程度用いられる。「AHŌ アホウ 阿呆」, 「AI-BŌ アイボウ 相棒」, 「AIKIYŌ アイキヤウ 愛敬」と、漢語 (「相棒」を除く) がほとんどを占める。「ABUNAKU, or ABUNŌ アブナク 浮雲」(再版ナシ)「AGANAI, -au, orō, -atta アガナフ 贖」(3 版は「AGANAI, -AU アガナフ 贖」)「AGATSZRAI, -ō, -ōta アゲツラフ 論」(3 版は「AGATSZRAI, -AU アゲツラフ 論」)と再版まで活用に用いられるようである。外来語は「BIRŌDO ビロウド 天鷲絨」がある。

OO は、「YOSOOI, -ō, -ōta ヨソホフ 粧」(542 右) の 1 例 (再版は変更ナシ, 3 版は「YOSOOI, -OU ヨソホフ 粧」) がある。

OU は、「AOUMA アヲウマ 青馬」(12 右) と「AOUNABARA アヲウナハラ(マ) 滄溟」(12 右) の 2 例 (再版以降も変更ナシ) のようであり、語構成を意識しての表記と考えられる。

〔表 1〕 各列の総数 (傍線は再版での使用を示す)

ア列		イ列		ウ列		エ列			オ列		
<u>Ā</u>	<u>AA</u>	<u>Ī</u>	<u>II</u>	<u>Ū</u>	UU	<u>Ē</u>	EE	<u>EI</u>	<u>Ō</u>	OO	OU
14	0	120	220	350	0	0	2	630	2,800	1	2
全て和語		多く和語		ほとんど漢語		ほとんど漢語			ほとんど漢語		

※ 改版の過程で追加されたり削除されたりするものもあり (また一部記載の変更), 全ての確認はなし得ていないが、一部異なりはありながら 3 版は再版を踏襲しているものと考えて良さそうである。

再版以降, 〔表 1〕 から、全体的に、ア列は  $\bar{A} \rightarrow AA$ , イ列は  $\bar{I} \rightarrow II$ , ウ列は  $\bar{U}$ , E 列は EI, オ列は  $\bar{O}$  に集約しているものととらえることができる (参考資料 [キ] 参照)。

いわゆるヘボン式ローマ字が形成されていく経緯 (木村 (2015)) はいろいろとあるために丁寧に説明を行わねば誤解が生じる面がある (長くなるので控える)。また研究書・辞書・会話書・新聞など、それぞれに必要なとされる表記の度合いによって、さまざまな方法が行われている。なお、3 版の PREFACE に次のような記述がみられる。

Though somewhat against his own judgement, but with an earnest desire to further the cause of the Romajikwai, he has altered to some extent the method of transliteration which he had adopted in the previous edition of this work, so as to conform to that which has been adopted by this society. These alterations are few and are fully explained in the Introduction.

【試訳】 著者自身の判断にいささか反するが、羅馬字会の熱心な希望というよりも主張によって、

この会で採用されているものと一致させるために、著者は、再版で採用した翻訳（筆者注：ローマ字つづりを指すか）の方法をいくつか変更したのである。これらの変更はごくわずかで、序論で十分に説明されている。

<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei/search?lang=&edition=03&zoom=0&section=4>

ただし、ほぼ初版の段階でつづり方の方向性は定まっている（拗音については参考資料〔キ〕の注8の指摘もある）ととらえて良いように思われる（<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei/roma.html> ※一部のつづりを掲載）。さらにアストンのもの（『日本語口語文典』（1869）が羅馬字会のものに近いとする見解がある（吉岡（1996））。なお、再版の序文にもアストンの名が挙がる（参考資料〔イ〕参照）。

また、初版と参考資料〔キ〕に挙がる例と符合するものが散見することは興味深い。ヘボンが日本語のローマ字つづりの見解を整理し、広めたという点では了解し得ると考える<sup>4</sup>。

#### 4. 現状と検討課題など

日本語の表記として受け入れられるものである必要がある。そのためには、極力、端的で付帯条件などが少ないことが求められる。そして、長音の記載の方向性が、全体のバランスや整合性などに関わる場所であると考えられる。いろいろなつづり方があり、それぞれに理由と経緯・歴史があるのだが、ここでは試みに、ヘボン式（細部は個々にさまざまであるが）に、日本式と訓令式を交えつつ、現状および検討課題について、現時点での私見を記す。

- ① 多用な表記にあふれているので、一元化は難しいと考える。「出力（表示）する（読む）」ことと「入力する（書く）」ことの異なり。許容（もしくは目安・よりどころ）などで柔軟に対応するか。
  - 「令和4年度 国語に関する世論調査」の「問9」のアンケート結果でも「一つの言葉や名前くらの長さまで」（88.4%）であることが確認できる。「文章を書き表すものから単語を書き表すものへ」の移行ととらえることができようか。
  - 漢字仮名まじりのためのローマ字入力と、ローマ字表記を表示させるための入力は異なる。
  - 整然とした文字表記の体系（斎藤（2023））。
  - 日本式と訓令式は、諸説あるが歴史的にサ行・タ行（・ハ行）に無理がないとも言える（参考資料〔ク〕参照）。経緯・歴史を含め、それぞれに特徴や利点があり重要なつづり方である。
  - 人名（パスポートを含む）・地名、および外来語などのつづり方（②参照）。
  - 情報機器での入力方法の多様化と実際の複数のつづり方との関係（②参照）。
- ② いかに整合性をとるのは難しい問題である。いずれのつづり方にしろ、シミュレーションを行い、できることとできないことを精査し、調査結果を交えて検討する必要がある。一つの決定が他のことも決定することに繋がる。
  - 長音について（ÔまたはŌ, O, OO, OOとOU, OHが主なところであろう）、本則を符号（もしくは無表記）、許容で情報機器でのローマ字入力ベース（ただし、OOとOUの使い分けなど、考え方としては仮名遣いと同じであり、明確な説明が必要）とするか（ウ列も連動）。
    - ◇ 四つ仮名にも同様の問題が生じるため、長音と連動して対応する必要がある。
  - 撥音をNとするかMとするかは、後ろに続く子音によって変化が生じているため、変動的で

---

<sup>4</sup> 先行する類する綴りについても精査が必要である。

あると言える。ただし、いずれの入力も NN となる。

- 促音において、例えば「抹茶」を MACCHA と MATCHA と MATTYA (日本式・訓令式) と示すことが可能である。ただし、入力には関わる (MACCHA と MATTYA と MACCYA は○, MATCHA は× (ただし, MACCYA はいずれのつづり方にもあてはまらない))。
- 英語話者が OO を「ウ」としてしまうことは重要である (例えば, アストンの『日本語口語文典』(1869) に, ‘u is pronounced like oo in fool.’ といった説明がある) が, これまでも OO (上述の 2. 考えられることの①と参考資料 [オ] の実際の運用) としているものもある<sup>5</sup>。また, W.H. メドハーストとの関り (陳 (2023)) も考慮する必要がある。他にも, ヘボン式において CHI の読み方 (茅島編 (2012)) などをどのように考えるのか。
- 実際には口蓋化や撥音も複数の音を使い分けられる (鼻濁音や母音の無声化のこともあるが) が, ヘボン式は全てつづりに反映しているわけではない。状況に応じて変動的であるため書き分けには限界がある。全てに対応することは運用上, 現実的ではなく, 必要性という面ではどこかで線引きをしなければならない。
- 「日本語としてどのように表記しているかを示せば良い」のではないか。

③ 長音, 四つ仮名, 撥音, 促音の異なりについて, 情報機器での「ローマ字入力時の区別」(予測変換は除く) と, 「後接の子音による変化」から分類する ([表 2] 参照)。

- 長音・四つ仮名…情報機器での「ローマ字入力時の区別」が必要である (例, 長音 (○ KOUBE と× KOOBE), 四つ仮名 (JI と DI (例, 鼻血), ZU と DU (例, 三日月)) ものを《変動 1》, 区別が必要ではないものを《変動 2》《変動 3》とする。
- 撥音…「後接の子音による変化」が生じるものを《変動 2》とする。なお, 後接の子音 (B・M・P) によって M とすることができるものが限られている ((条件設定によるが) 全て N にできても, 全て M にはできない)。
- 促音…《変動 3》は (条件設定によるが) TCH でも CCH でも可能である (入力と言う面では CCH と TTY と CCY が可能, TCH は不可)。ただし, 日本式・訓令式では TTY となる。なお, その他の促音 (例, SEKKEN, KITTE など) は変化が生じないものと思われる。
- 一方, ウ列とオ列の長音符合の使用 (もしくは符号の不使用 (かつオ列 (OO と OU) の別なし)), 四つ仮名は JI と ZU のみ, 撥音は N への一本化, いずれも使い分けを行わないため《固定》と言える。

[表 2] 変動の分類

	長音・四つ仮名	撥音	促音
	《変動 1》	《変動 2》	《変動 3》
	OO と OU JI と DI, ZU と DU	M の際に N とするか	T または C (CH が後接)
ローマ字入力時の区別	有	無 (NN で入力)	無 (CCH 等で入力)
後接の子音による変化	無	有	無

<sup>5</sup> 直接的な関わりというわけではないが, 『増補略註 明治節用大全』(1881) の「英語数字并いろは」では「OO オ」(12 オ・ウ) とする記述がある (<https://dl.ndl.go.jp/pid/863592/1/13>)。ただし, 他のウ列については, U を用いている。

先にも記したが長音の記載方法が他の表記などにも連動する面があると考え、全体のバランスや整合性などを検討する上で、以下に一部繰り返しになるが整理しておきたい。

#### <長音>

- ・ オ列長音は  $\bar{O}$  や  $\hat{O}$  であるのならば使い分けはなく一定である《固定》。なお、 $\bar{O}$  か  $\hat{O}$  かは調査結果で検討。TOKYO のような符号無表記 (O または OO<sup>6</sup>) も《固定》と言える。ただし、符号無表記の O と U については長音であるか否かの区別が付き難い (例、「小野」と「大野」, 「ゆき」と「ゆうき」など)。一方、OO と OU を使い分けることは情報機器でのローマ字入力 (仮名遣い) 時に必要である《変動 1》。
  - 歴史的に横棒 (マクロン) も山形 (サーカムフレックス) も 1860 年代の使用が確認できる。一方、活字に手間がかかることもあり、O や OO が用いられたとも考えられる。
  - 羅馬字書方調査報告 (1900) と内閣訓令 (1937) では横棒 (マクロン) で示し、内閣告示・内閣訓令 (1954) では山形 (サーカムフレックス) となる
  - 英語をはじめとした関わり (例, TOKYO, TOFU, JUDO など) (早川 (1996))。
- ・ ウ列長音は  $\bar{U}$  でも符号無表記 (U または UU) でも《固定》。ただし、オ列長音に連動。
- ・ OH の使用は後接する子音が H の際に促音になる (例, OHTANI SHOHHEI)。
- ・ ア列長音  $\bar{a}$ , イ列長音  $\bar{i}$ , エ列長音  $\bar{e}$  の扱い, および実際の使用状況。

#### <撥音>

- ・ B, M, P の前は N の代わりに M で記す《変動 2》か, 全て N で記す《固定》か。
  - M は情報機器でのローマ字入力には用いることができない。
  - 後接する子音の異なりによって変化が生じることが, 他のつづりとの大きな違い。
    - ◇ N か M は, 口の中 (歯音・歯茎音) か外 (両唇音) かの問題ととらえられる。FU とするが HI は未対応であるのは同様の考え方か。ただし, SHI, CHI, TSU は該当しない。
      - 道路案内標識は N となっている。
- ・ 19 世紀の資料では, K と G の前の撥音も書き分けたり, 鼻母音を記したり, B, M, P の後に N を用いたりした例もある。

#### <促音>

- ・ 子音を重ねるが, 「っち」「っちゃ」「っちゅ」「っちょ」に限り, CH の前に C または T を加える《変動 3》。
- ・ つづり方による情報機器でのローマ字入力の可否 (× TCH)。
- ・ SHI や TSU の促音も誤解が生じがちな。

#### <四つ仮名>

- ・ JI と ZU のみで進めるのならば一定である《固定》。ただし, 情報機器でのローマ字入力 (仮名遣い) によって JI・DI, ZU・DU を使い分けると変化が生じる《変動 1》。<長音>と同じ問題が生じる。DI と DU は, 外来語表記 (ディとドゥ) との関りも生じるか (ヂとヅとの棲み分け)。

#### <人名 (パスポートを含む)・地名, および外来語などの対応範囲>

- ・ どこまで対応するのか (肥爪 (2022)) の判断が必要。人名・地名, また外来語への対応も含め, 何をどこまでローマ字で補わなければならないのかが深く関わる (「外来語の表記」の第 1 表と第 2 表

---

<sup>6</sup> O と OO の場合, 「高温 KOON・KOOON」と「古音 KOON」をいかに分けるのか。「古音 KO 'ON」などとなろうか。

との関わりなど)。

- 外来語の表記に手を加えることがあるのならば、あわせて検討することが効率的。
- ・ 例えば、日本語の標準的音節に該当するもののみローマ字表記を設定、ただし、パスポートに用いられる人名は追加して対応する（使用例を精査）。
  - 一例として、外国式氏名のローマ字表で BUI を「ヴィ」とする。  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo\\_kadai/iinkai\\_45/pdf/93390601\\_12.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo_kadai/iinkai_45/pdf/93390601_12.pdf)
- ・ 外来語はカタカナで記されるが、ローマ字表記では同一箇所は（外来語ではなく）外国語で記されているものと思われる（例、高輪ゲートウェイ）。ただし、英語以外の外国語はどうするのか。また、国語教育や日本語教育や英語教育などとの関りもあろう（調査結果で検討）。

<情報機器でのローマ字表記の入力と出力（表示）>

- ・ 半角時にキーボード（ソフトウェア含む）を長押しすることで、符号付きのローマ字を選択できる情報機器がある。全体に普及することで符号付きのローマ字の利用が促進されると考える。

## 参考文献

- 吉田澄夫・井之口有一（1962）『明治以降国字問題諸案集成』風間書房
- 杉本つとむ・岩淵匡編集（1994）『新版 日本語学辞典』おうふう
- 早川勇（1996）「OED における日本語の初出年調査」「言語」25-12
- 吉岡英幸（1996）「『日本口語文典』のローマ字表記」「早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊」41
- 石綿敏雄（1997）「ローマ字使用の実態—かな・漢字との比較—」「国文学 解釈と鑑賞—特集 日本語の「国際化」とローマ字—」62-1 至文堂
- 高橋太郎（1997）「駅名のローマ字表記と、オ段長音表記の国際化」「国文学 解釈と鑑賞—特集 日本語の「国際化」とローマ字—」62-1 至文堂
- 福居誠二（1998）「ローマ字による長音表記特にオ列長音に注目して」「聖和大学論集（人文学系）」26B
- 杉本つとむ（2002）「〈ローマ字〉を歴史の眼で見る—危機に立つ日本語—」『近代語研究』11
- 文化庁編集（2006）『国語施策百年史』ぎょうせい
- 茅島篤編集（2012）『日本語表記の新地平—漢字の未来・ローマ字の可能性—』くろしお出版
- 木村一（2015）『和英語林集成の研究』明治書院
- 常盤智子（2015）『英学会話書の研究』武蔵野書院
- 木村一（2016）「ローマ字表記のわかりやすさとわかりにくさ」『わかりやすい日本語』野村雅昭・木村義之編 くろしお出版
- 楠家重敏（2017）『ジャパノロジーことはじめ—日本アジア協会の研究—』晃洋書房（1997 の改訂版）
- 肥爪周二（2022）「漢字音・外来語音と日本語の音韻体系」「日本語学」夏 509
- 斎藤純男（2023）「現在（ならびに近い将来）の日本語を書き表すのに適したローマ字表記を考える」文化審議会国語分科会国語課題小委員会（第60回）資料
- 陳力衛（2023）「『ドゥーフ・ハルマ』のもう一つの流れ—フィッセルのローマ字本の位置づけ—」「国語と國文學」100-1

## 参考資料

※ 〔キ〕〔ク〕以後についてはここでは触れ得ない。

※ リンク先の画像は、国立国会図書館、国立国語研究所、明治学院大学図書館のものである。

### 〔ア〕 初版 INTRODUCTION. The Syllables in Combination.

ウ列長音とオ列長音に加え、イ列の「イヒ *i*」がある。またア列長音の「アア *ā*」は直下の表内に記載されるが、エ列長音の記載は無い（以下、傍線は筆者）。

The syllables commencing with the soft aspirates, *h* and *f*, and *y* for the most part, lose their consonants, and their vowels combine with the vowel of the preceding(マ) syllable; sometimes forming a diphthong; as, *a-hi*, *ai*; *afu*, *au*, or *ō*; sometimes lengthening the sound of the first vowel; as, *nu-fu*, *nū*; *to-ho*, *tō*; *i-hi*, *ī*; *yo-fu*, *yō*; *ho-ho*, *ō*.

【試訳】 *h・f・y* の柔らかい気音で始まる音節は、ほとんどの部分で子音を失い、それらの母音は先行する母音の音節と結合し、時に二重母音になる。例えば、*a-hi* は *ai* に、*afu* は *au* や *ō* になるというわけである。時に、最初の母音の音を延ばす。例えば、*nu-fu* は *nū* に、*to-ho* は *tō* に、*i-hi* は *ī* に、*yo-fu* は *yō* に、*ho-ho* は *ō* となるわけである。

<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei/search?lang=&mode=&book=37&page=10&zoom=0&section=6>

<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei/search?lang=&mode=&book=37&page=11&zoom=0&section=6>

### 〔イ〕 再版 (1872) PREFACE.

*i* から *ii*, *ā* から *aa* をはじめ、つづりの変更が記されてる（ウ列長音とオ列長音を示すことになる）。また、最後に J. J. ホフマン, S. R. ブラウン, W. G. アストンの名前が挙がる。特に、当時の英米の宣教師や外交官、また国内外の外国人の日本語研究者について検討の要がある。サトウ（仮名遣いを考慮したつづり方の提案など）をはじめ、英字新聞や雑誌などを通して外国人間でローマ字つづりへの意見交換などが行われている（常盤（2015）・楠家（2017））。

The transliteration of one language into the letters of another, is always difficult, and students seldom agree, each one having a mode of his own. For the sake of some degree of uniformity in this matter, and to retain the final *u* in the adjective form of the verb, the orthography of *tsz*, *dz* and *sz* of the first edition has been altered to *tsu*, *dzu*, and *su*; also *ī* and *ā* have been changed to *ii* and *aa*, and *wi* in the beginning of a word to *u*; all words which before were written elliptically have been written in full; as *h'to*, *ftatsu*, *k'wa*, *h'yo*, are now written *hito*, *futatsu*, *k'uwa*, *hiyo*, always in accordance with the Japanese *kana*.

【試訳】 ある言葉を他の文字に翻訳することは常に難しく、研究者は減多に賛同しないため、各々が自身の方法を持つことになる。この問題をある程度統一するたるために、動詞の形容詞形態（連体形）の末尾 *u* を保持し、初版の *tsz・dz・sz* のつづり方が、*tsu・dzu・su* に変更された。そして *ī・ā* は、*ii・aa* に変更され、*wi* で始まる単語は、*u* に変更された。以前（\*初版）省略されていた全ての単語は、完全な形で書き表した。例えば、*h'to・ftatsu・k'wa・h'yo* は、*hito・futatsu・k'uwa・hiyo* とし、常に日本語の仮名と一致している。

<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei/search?lang=&edition=02&zoom=0&section=4>

〔ウ〕 再版 (1872) INTORODUCTION. The Syllables in Combination.

上述の〔イ〕の PREFACE. を受けた記述になるが、初版の i から ii となっている。なお、3 版 (1886) の記載も同一である (直下の表は一部異なる)。またア列長音の「アア ā」は直下の表内の記載が削除され、エ列長音の記載は依然として無い。

The syllables commencing with the soft aspirates *h* and *f*, and *y*, when preceded by another syllable, for the most part, lose their consonants, and their vowels combine with the vowel of the preceding syllable; sometimes forming a diphthong; as, *a-hi* becomes *ai*, *a-fu*, becomes *au*, or *ō*; sometimes lengthening or reduplicating the sound of the first vowel; as, *nu-fu* becomes *nū*; *to-ho* becomes *tō*, *i-hi* becomes *ii*, *yo-fu* becomes *yō*, *ho-ho* becomes *ō*.

【試訳】 他の音節に先行された時、*h・f・y* の柔らかい気音で始まる音節は、ほとんどの部分で子音を失い、それらの母音は先行する母音の音節と結合し、時に二重母音になる。例えば、*a-hi* は *ai* に、*a-fu* は *au* や *ō* になるというわけである。時に、最初の母音の音を延ばしたり、結合したりする。例えば、*nu-fu* は *nū* に、*to-ho* は *tō* に、*i-hi* は *ii* に、*yo-fu* は *yō* に、*ho-ho* は *ō* となるわけである。

<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei/search?lang=&mode=&book=58&page=13&zoom=0&section=6>

<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei/search?lang=&mode=&book=58&page=14&zoom=0&section=6>

〔エ〕 3 版 (1886) INTORODUCTION. The Syllables in Combination.

The system of orthography adopted in the previous edition of this work has been modified in a few particulars so as to conform to that recommended by the Romajikwai. Thus the *y* is omitted before *e*, and words which in the former edition began with *y*, in this begin with *e*, excepting the words *yen* (doller), and *ye*, (to, towards). The *y* is also omitted in the body of purely Japanese words; and such words as were formerly written *hayeru*, *miyeru*, *iye*, *yuye*, are now written *haeru*, *mieru*, *ie*, *yue*. But in words derived from the Chinese, where the second syllable commences with ㄛ or ㄝ, the *y* is still retained, as being preferable to the hyphen; thus *ri-en*, *san-etsu*, *sho-en*, are written *riyen*, *sanyetsu*, *shoyen*.

【試訳】 今回の前の版 (\*再版) で採用したつづり字の体系を、羅馬字会によって推奨されたつづり方と一致させるために、いくらかの事項について修正している。例えば、*e* の前の *y* を省略した。そして *y* で始まる再版の単語は、*yen* (doller) と *ye* (to, towards) を除いては、この版では *e* で始まる。*y* は、また純粋な日本語の単語 (和語) の中心部分にある際は省略される。そして、そのような単語は、以前、*hayeru・miyeru・iye・yuye* と書いたが、現在は、*haeru・mieru・ie・yue* と書く。しかし、第二音節が「ㄛ」や「ㄝ」で始まる中国語 (漢字? 漢語?) を起源に持つ単語では、ハイフンより望ましい *y* は、依然として保持されている。例えば、*ri-en・san-etsu・sho-en* は、*riyen・sanyetsu・shoyen* と書かれるのである。

<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei/search?lang=&mode=&book=108&page=17&zoom=0&section=6>

<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei/search?lang=&mode=&book=108&page=18&zoom=0&section=6>

〔オ〕 S. R. ブラウン *Colloquial Japanese* (1863)

ヘボンととてもつながりの深い S. R. ブラウンによる *Colloquial Japanese* (1863) の Vowel Combinations. (母音の結合) に次のようにある (以下, 加藤・倉島 (1998) 『幕末の日本語研究 S. R. ブラウン 会話日本語』 (三省堂) p.338 の訳出を用いる)。初版に 4 年先行するが, EI は Ē と認識していないことが分かる。

Ai, oi, ei, and ui, are proper diphthongs, and both vowels are distinctly heard. But, au, ou, and eu, often become oö in pronunciation. Thus チガフタ is pronounced chigoöta, omou [ヲモフ] omoö; and meu, mioö; shi-yau, is pronounced sh'oö; and seu, sh'oö, wau, woö [ワウ].

ai, oi, ei, ui は正規の二重母音で, 両方の母音は明瞭に発音される。しかし, au, ou, eu はしばしば oö という発音になる。そこで, チガフタは chigoöta, omou (ヲモフ) は omoö に, meu は mioö, shi-yau は sh'oö, seu は sh'oö, wau は woö と発音される。

[https://mgda.meijigakuin.ac.jp/senjin/book\\_image/328?page=9&zoom=0](https://mgda.meijigakuin.ac.jp/senjin/book_image/328?page=9&zoom=0)

<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/senjin/book/colloqualjp.html>

〔カ〕 E. M. サトウ・石橋政方 *An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language* 初版 (1876)

サトウによる『英和俗語/口語辞典』(上述の邦題) 初版の主要な発音を示す個所 (PRONUCIATION) によると, 強変化動詞における現在形において OU を使用するとある。「追う, 乞う, 沿う, 問う」などになろうか (一例として, CHARTER, t.v. (to hire) yatou, 1. (p.57 左))。「雇う」の終止 (現在) 形は yatou であり, u を i にすれば, yatoi と連用形にあたる基本形 (root) を示せる (以下, 【試訳】)。

*ou* is the same as *ô*; this spelling has been retained only in the present indicative of some verbs of the first conjugation, in order to facilitate the application of the rule for finding the root.\*

*ou* は *ô* と同じである。このつづり方は, 基本形 (root) を見つけるための規則を適用しやすくするために, 一部の第一活用動詞の現在形を示す際にのみ残されている\*。

\* This rule is, 'change the *u* of the indicative present (in verbs of the first conjugation only) into *i*'

\* この規則は, 「(第一活用の動詞のみ) 現在形を示す際の *u* を *i* に変える」ものである。

※ リンクなし

〔キ〕 『羅馬字早學び』 (1885.6 出版)

矢田部良吉による「緒言」の 3 ヶ条に「第一 假名の用い方に據らずして發音に従ふこと」「第二 尋常の教育を受けたる東京人の間に行はるゝ發音を以て成るべきたけ標準とすること」「第三 羅馬字を用ふるには其子字は英吉利語にて通常用ふる音を取り其母字は伊太利亞語の音 (即ち獨逸語又は拉丁語の音)<sup>7</sup>を採用すること」とある (詳細は続けて記載がある<sup>8</sup>)。

<sup>7</sup> 蘭学との関りはここでは措くこととする。また, 子音も含め, 先行する外国語話者による日本語のローマ字綴りとの関りも考慮する必要があるものとする (杉本 (2002))。

<sup>8</sup> 「緒言」の後半に HYAKU を HIYAKU と記すことなどについて「百, 非役等の音をば日本人は常に明かに區別すれば同様の書き方を以て之を表するは甚不條理なり恐くは君は日本語の拗音の性質を御

また、長音の扱いについては、次のようにまとめている。

第十三節 AIUEO の五母字の音を伸ばしてアー、イー、ウー、エー、オー、と呼ぶときは字の上に長音の符號即ち「ー」を附して短き音と區別す左の如し

Ā Ī Ū Ē Ō

(中略)

右の五長音の中 ŪŌ の外は用ふること少し尚第十六節より第二十節に至るまでを見るべし

但し嘆息詞又は間投詞の「アー」「エー」は Ā Ē と書くべし又俗語の「ババー」「アニー」「ア子一」は babā, anī, anē と書き詩歌、四時を「シーカ」「シージ」と讀むときは shika, shiji と書いて適當なるが如し

第 16 節～第 20 節にかけて、次のように記している。

- ・ 第 16 節…ei を含む漢語 (エイ (英)・ケイ (経)・セイ (清) など) を挙げ、「ē (中略) 等と書くべからず」とある。
- ・ 第 17 節…ii を含む「ニヒナメ (新嘗) Niiname」などを挙げ、「Niname (中略) 等と書くべからず」とある。
- ・ 第 18 節…ou を含む「オモフ (思) omou (中略) 等の動詞は omō (中略) 等と書くべからず」とし、「思ヒテ」などが「思フテ」などに転ずるときには「omōte (中略) と書くべし」とある。また、俗語にも触れ、「ユカウ」などは「yukō (中略) と書くべし」、「子ガフ (願) negau」などを「子ゴ一」と讀むときには「negō (中略) と書くべし」とある。
- ・ 第 19 節…uu を含む「スクフ (救) sukuu (中略) 等の動詞は sukū (中略) 等と書くべからず」とし、「スクヒテ」などが「スクフテ」などに転ずるときには「sukūte (中略) と書くべし」とある
- ・ 第 20 節…動詞「イフ (云) なる動詞は iu と書くべし yū と書くべからず」、「イヒテをイフテと轉ずるときも iute と書くべし」

その後、促音 (t の使用) と撥音 (m と n) の記載などが続く。

なお、羅馬字會による『羅馬字にて日本語の書き方』(1885.3.20 出版) の「緒言」には「チャンバーレン氏イービー氏外山氏寺尾氏并に余等二人 (筆者注: 神田乃武・矢田部良吉) を書き方の原案を作る委員に撰みたり (中略) 集議の席にはヘボン氏とテヒヨウ氏とを招待して其説を聴き熟議の上原案を作ったり」とある。『伯爵井上薫君  
英國公使フランケット君羅馬字會總會演説筆記』(1886.3 出版) の羅馬字會役員<sup>9</sup>にはヘボンの名前は無い。

また、それぞれ一部ではあるが、同類似の記述が、羅馬字會『羅馬字にて日本語の書き方』(1885.3.20 出版)、記者による雑録として「羅馬字早學ひの緒言」「東洋学芸雑誌」44 (1885.5.25) にある。

<https://dl.ndl.go.jp/pid/992339>

<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldb/bunken.php?title=rrokakikata>

<https://dl.ndl.go.jp/pid/862107>

<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldb/bunken.php?title=toyogakuge>

---

承知なきか又は平文先生の辭書に御拘泥なさるゝが如し」とあり、『和英語林集成』初版 (1867) と再版 (1872) に対してのものであろう (3 版は翌年 (1886) に刊行)。

<sup>9</sup> 外国人では、羅馬字會役員 事務委員に「チャンハレン、テヒヨウ」、書き方取調委員に「ブリンクレー、イービー、テヒヨウ、ホール」が載る。

一部分を引用する。

五十音の表（筆者注：ローマ字対照表）を上の如く書きては yewu 等の假字今なき者を新に作りたる様にて怪しく思うふ人もある可けれど元五十音の目的は人の口より發する音を顯はさんとするに外ならねは上の如くに爲し置きても音を覺ゆる爲の表として考ふるときはいと輕便にして好かる可し、又古來我國には五十音別々皆な文字ありしと云ふ説も和學者中に行れ黒川眞頼氏の著されし詞の栞、活語指掌、物集氏の日本文典等にも皆々之を區別して書れたり、そはともあれ上の如く五十音を定め置けば甚た學ひ易くして覺へ易く、又動詞、形状言杯のはたらきを覺るにも至りて簡單にして辞の移り易りもはつきりと分る故に從來の五十音に當る當らぬの論は暫く御預りと致し、音韻を覺る爲の表として置きたし、彼羅馬字會委員は東京中等人の發音を元とし伊太利、羅打、獨逸等の母音を用ひ亦子音は英吉利の用法に従ひたれば五十音縦て横の働き方杯の規則も消失せ強て之れを顯さんとならば規則の斷り書き等も多からんとは勿論也

長音・撥音・促音の扱いについては、Rōmazi Sinsi. 1 号 (1886.5.10) の「羅馬字用法」に次のようにある。

長キ音ハ母字ノ上ニ横棒ヲ書ス

アー イー ウー エー オー カー キー クー ケー コー

ā ī ū ē ō kā kī kū kē kō

ノ如シ然レ<sup>レ</sup>二重音ニテ長音ニ似タルモノハ au 逢フ ou 追フ kii(マ)紀伊 Sii(マ)私意ナトト書ク

撥<sup>ハ</sup>ル音ハ m 又ハ n ヲ用ウ(マ)

字音ニツ重ナル<sup>ツ</sup>音ノ促<sup>ツ</sup>ルモノハ假名ニ拘ハラズ第二音ノ頭字ナル子字ヲ重ヌ但シ促ル音ハ k p s t ノ四字ニ限レリ次ノ如シ

Gakkō 學校 Teppō 鐵砲 Zassi 雜誌 Bettō 別當

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1525609/1/24>

<https://dl.ndl.go.jp/pid/12917634>